

# 斯文

第九編 第九號

昭和七年六月十五日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和十二年八月廿七日印刷 昭和十二年九月一日發行

## 要目

我が國體と漢文……………	鹽谷溫
重松教授將來の切韻及び玉篇の寫真につきて……………	岡井愼吾
最近一年間に於ける民國學界の動向に就いて……………	豐田穰
北支紀行……………	
改正教授要目研究協議會と私の希望……………	林古溪
質疑應答……………	

斯文會發行

後の暑熱は又一段に候も、百三十度の異域に活躍せる將士の惡戰苦闘を想望すれば、忽ち勇氣百倍、兩人共に汗を拭き、頑張り候。

折りしも今夜は舊盆の十五夜、海より上る明月に對し、椅子を庭前に駢べて、内子と人月雙清を慶し、遙に懷を遠征の將士に寄せ候。

一輪海月共潮生 圓滿光華似鏡明  
知是嬌娥憐戰士 何人不起望鄉情

帝國の將來は支那に在り。吾人は固より親善を希ひ候へども、支那の抗日に對しては、徹底的に膺懲せざるべからず候。抑ゝ事の起るは、起るの日に起るに非ず、由て來る所有之候。今回の衝突も突發とはいへ、その深因は二十年來の排日教育に基き候。排日教育を根絶せずして、兩國の親善を謀るは、猶木に緣りて魚を求むるが如くに候。他日國交舊に復し、雨降りて地固まる時ともなれば、同道の孔子教、同文の支那語支那文學の振興が最も大切と存候。斯文會の任務は益々重大を加へ申候。余が元曲選の研究も、大に望を他日に囑し、不斷の努力をつゞけ可申候。

(八月廿二日夜)

日豫定の講義を終り、正午より修了式を舉行し、鹽谷部長より修了證書授與並に一場の挨拶あり、修了者總代齋藤富次氏答辭を述べ、萬事滞りなく第十九回夏期講習會を終了せり。尙、會期中には、記念撮影、茶話會の開催等、交誼を敦うすることに努めたるが、本年は前年に比し遙に多數の聽講者ありたることは斯道の爲、會心の至にして其の氏名左の如し。(氏名申込順)

田代 秀德(東京) 松田 淨念(兵庫) 早川光三郎(長崎)  
上田喜太郎(長崎) 石川 益文(福島) 山田 富子(東京)  
成友 正明(東京) 鈴木源二郎(千葉) 細田三喜夫(茨城)  
寺尾 正一(愛媛) 小池 政雄(東京) 山本 徳一(東京)  
川浦 玄智(千葉) 永井 治助(富山) 菅原 憲雄(新潟)  
次村 洋(東京) 杉沼ヨシコ(東京) 劍持 久(東京)  
伊東 四郎(東京) 木村雄二郎(兵庫) 今井 清(東京)  
尾高 章(新潟) 齋藤 富次(東京) 福島 健重(東京)  
高橋 君平(東京) 江口 丈彦(上海) 戸田 浩曉(東京)  
刑部 陽(山梨) 占部 正廣(島) 相澤喜一郎(東京)  
紅 顯 爾(東京) 河合 徳孝(東京) 宮田 定繁(朝鮮)  
佐藤 晴久(東京) 推木 眞一(東京) 仲澤 長光(東京)  
村井 尚義(富山) 萩原 正安(神奈川) 桑 松雄(千葉)  
池田 壽助(東京) 岸本 修一(滋賀) 時野谷 貞(茨城)  
田所 義行(廣島) 菅野 尚志(東京) 宮崎 藤藏(愛知)  
繩田 喜助(東京) 小幡 清子(東京) 巖谷 春生(東京)  
石崎 又造(東京) 富岡 惠(東京) 内田 新也(東京)

報 告

○夏期講習會

本會第十九回夏期講習會は七月二十六日より三十一日まで六日間、斯文會講堂に於て開催したるが、講義題目並に講師は次の如し、

我が國體と漢學附詩文の朗吟と朗讀法(四時間)

文學博士 鹽谷 溫氏

非儒教論について(八時間) 文學博士 諸橋 轍次氏

中等學校國語漢文科改正教授要目及漢文

教授法概説(六時間) 文學博士 山口 察常氏

支那小説の概念(六時間) 文學士 辛島 驍氏

にして當初講師は鹽谷、諸橋、辛島三氏及び文部省督學官坂井喚三氏の「靖獻遺言講義附中等學校國語漢文科教授要目解説」の題下に講義ある筈なりしが、公務の都合に依り前記の如く山口察常氏代つて講師となり、各講師何れも熱心に講義せられ、又教化部長鹽谷博士は連日早朝より出勤して諸般の指揮斡旋等に努められたり。かくて七月三十一

竹本 了介(東京) 小林 安司(福岡) 越次 政一(東京)  
藤井 眞諦(新潟) 最所 顯文(東京) 高橋平太郎(東京)  
關根芳太郎(埼玉) 深澤 泉山(梨) 横田庄三郎(東京)  
中曾根昌舜(東京) 岡田まこと(東京) 清水精四郎(東京)  
三橋 濟(東京) 宮内 四郎(東京) 淵澤 行雄(新潟)  
廣瀬 正(茨城) 山口 正(長野) 堤 耕平(東京)  
六月 繁(東京) 山本岸太郎(東京) 安田 榮作(神奈川)  
小島 三郎(埼玉) 高月金次郎(東京) 野崎 時次(大阪)  
上野 康貴(新潟) 高橋 峻(東京) 中島 英樹(香川)

尙、講習員より醸出せられたる皇軍慰問資金拾貳圓五拾錢は斯文會講習會員一同の名義にて、八月一日東京日日新聞社に寄託し置きたり。

○聖堂夏期修養會

第二回聖堂夏期修養會は参加申込者多數にして一時に收容し難きたため、男女二組に分ち、男子部は八月一日より五日まで、女子部は同六日より十日まで毎日午前七時半より十時半までとして開催し、講師の熱誠と兒童の精勵と相俟つて、良好の成績を挙げたるが、開始の第一日には鹽谷教化部長特に臨場して懇篤に訓示せられ、参加兒童等大に感激の色あり。而して修了式は男子部は五日、女子部は十日各別に舉行せるが、五日には部長差支の爲、山口會幹代つて

修了證書を授與し且親しく訓示あり。式場には松井教化委員及び各講師参列せり。此日世界教育會議に参列せし諸外國の委員二十餘名は聖廟に参拜の序、此の式場の模様をも見學せり。十日舉行の修了式にも亦、山口會幹臨場して證書を授與し、鹽谷教化部長の訓示を代讀せらる、此日熊坂常議員及び各講師参列せり。兒童總代の答辭あり。尙、福島理事の寄贈にかゝる修養寶典は全兒童に頒布せり。式次第、修養等時間割、参加兒童數等次の如し。

修了式次第

- 一、開式
- 一、君が代合唱
- 一、勅語奉讀
- 一、勅語奉答歌合唱
- 一、修了證書授與  
男子部總代 今戸校 石川元次郎  
女子部總代 藏前校 寺田きよ子
- 一、福島理事寄贈  
男子部總代 下谷校 長島 千代  
女子部總代 四谷校 長島 千代
- 一、教化部長訓辭
- 一、兒童總代答辭  
男子部總代 本郷校 間庭金五郎  
女子部總代 麻布校 赤堀 富子
- 一、孔子頌德歌合唱
- 一、閉會

四谷高等小學校	男	九	女	三〇
今戸高等小學校	男	二一	女	一五
濟美高等小學校	男	一	女	九
清島高等小學校	男	七	女	一
藏前高等小學校	男	五	女	二五
市立上野中學	男	一	女	一
計	男	八九	女	一六一(合計二五〇)

鹽谷教化部長の訓辭

皆サンハ炎暑ノ折柄五日間ヨク勉強シテ本日日出度修了證書ヲ御受ケナサレマシタコトヲ御悦ビ申シマス。  
學問ハ實行ガ大事デス、皆サンハ修養會デ習ツタ孝經、論語、小學等ノ格言ヲ平生家庭ニ於テ、又學校ニ於テ、ヨク實行シ父母ニ孝ヲ盡シ、姉妹兄弟互ニ親シミ、先生ノ教ヲ守リ、朋友相勵ミ、卒業ノ後立派ナ日本女子トシテ皇國ノ爲ニ盡サレマス様切ニ皆サンノ自愛ト勉強ヲ祈リマス  
昭和十二年八月十日

財團 斯文會教化部長 鹽谷 溫

兒童總代の答辭(八月十日)

一言御禮申シ上ゲマス私達ガ聖堂ノ門ヲググリマシテカラ早ヤ四日を経過シ五日目ノ日ガ來マシタ  
世界三大聖人ノ一人デアル孔子様ノ御教ヘ下サレタ人ノ人

聖堂夏期修養會時間割

區別		月 日		第一時		第二時		第三時	
部 子 男		部 子 女		題目 講 師		題目 講 師		題目 講 師	
八月一日	孝經	高成田	講師	論語	鈴木	講師	小學林	講師	
二日	論語	鈴木	講師	詩	濱野	講師	論語	大島	講師
三日	論語	大島	講師	小學	多田	講師	孝經	高成田	講師
四日	歌	濱野	講師	論語	田口	講師	小學	多田	講師
五日	小學林	講師	孝經	高成田	講師	論語	田口	講師	
八月六日	小學林	講師	孝經	濱野	講師	論語	田口	講師	
七日	詩	高成田	講師	論語	鈴木	講師	小學	多田	講師
八日	孝經	濱野	講師	論語	鈴木	講師	小學林	講師	
九日	論語	田口	講師	小學	多田	講師	論語	大島	講師
十日	孝經	濱野	講師	論語	大島	講師	歌	高成田	講師

聖堂夏期修養會参加兒童數

本郷高等小學校	男	一七	女	五九
小石川高等小學校	男	五	女	五
下谷高等小學校	男	一五	女	一
牛込高等小學校	男	六	女	一三
麻布高等小學校	男	三	女	五

タル道ヲ講習生一同ト共ニ諸先生カラ聞キ學ビアラマシ覺エマシタ其の御教ニ副フ様尙一層ノ努力ヲ致シタイト思ヒマスコレモ偏ニ諸先生ノ面白クワカリヤスク御教ヘ下サレタ賜ト存ジマス  
甚ダ簡單デハ御座イマスガ講習生一同ニ代リス文會及ビ諸先生方ニ厚ク御禮申シ上ゲ尙諸先生ノ御健康ヲ御祈リ申シマス

昭和十二年八月十日

東京市立麻布高等小學校二學年 赤堀 富子

○役員逝去

本會の爲、多年盡力せられ其功渺なからざりし常議員法學博士花岡敏夫氏は、七月三十一日病氣の爲逝去せらる。洵に痛惜に堪へざる所なり。

○會員逝去

小山 高志氏 山岸 經應氏 守田 愿氏  
小林 正盛氏 高野 季八氏 郡司英太郎氏  
七條佐市郎氏 和田 英松氏  
右各位に對し謹みて弔意を表す。

# 第六回漢學大會廣告

左記要項に依り東京帝國大學文學部内漢學會及び財團法人斯文會合同主催の下に第六回漢學大會を開催し學術研究發表講演を舉行致候

## 記

場所 帝國學士院(上野恩賜公園内)

日 昭和十二年十月三十日(土曜日)

時 自午前十時至午後四時(一人當り二十分)

東京帝國大學文學部内漢學會

財團法人 斯文會

## 斯文會ノ目的及事業

本會ノ目的ハ儒道ヲ主トシテ東亞ノ學術ヲ闡明シ以テ明治天皇ノ教育ニ關スル勅語ノ趣旨ヲ翼贊シ我カ國體ノ精華ヲ發揮スルニアリ

本會ノ事業ハ斯道ノ宣傳、漢文教育ノ振興、漢學ノ研究及學生ノ養成、學資ノ補給、先聖先儒ノ祭祀、湯島聖堂ノ保管、雜誌其他必要ナル圖書ノ編輯發行等ヲ爲スニアリ

## 本會役員

總裁	伏見宮博恭王殿下
會長	公 爵 德 川 家 達
副會長	法學博士 阪 谷 芳 郎
同 公 爵	德 川 閑 順
同 文 學博士	服 部 宇 之 吉
同 文 學博士	宇 野 哲 人
總 務	文 學博士 中 山 久 四 郎
會幹祭務	文 學博士 山 口 察 常
會幹庶務	文 學博士 福 島 甲 子 三
同 會計	文 學博士 鹽 谷 溫
教化部長	文 學博士 飯 島 忠 夫
教育部長	文 學博士 諸 橋 徹 次
研究部長	文 學博士 高 田 眞 治
編輯部長	文 學博士

本會會員ハ會費トシテ年額金四圓ヲ齎出スルモノトス但シ學生ハ半額トス

## 廣告料

(一頁 金十五圓  
半頁 金八圓)

昭和十二年八月廿七日印刷  
昭和十二年九月一日發行

(本號定價金參拾五錢)

編輯人 佐藤文四郎  
東京市豐島區目白町千五十七番地

發行人 福島甲子三  
東京市本郷區駒込神明町七十番地

印刷人 吉原良三  
東京市牛込區早稻田鶴卷町百七番地

印刷所 株式會社 康文社印刷所  
東京市本郷區湯島三丁目一番地湯島聖堂構内

發行所 財團法人 斯文會

電話小石川(85)四六〇六番  
振替東京四五五三〇番